コラム　西洋古代史の泉　11

ローマ帝国とグローバル化

南　川　高　志

ローマ市とイタリアを中心に考えるローマ帝国史研究の一般的な傾向に対して、私は辺境に視点を移し、境界地帯からローマ帝国の本質と歴史的展開を見直す作業を進めてきた。その過程で、ローマ帝国の世界史的意義の一端を説明する「ローマ化」概念について、その形成と 20 世紀末になされた批判とを紹介し、若干の私見も述べた（とくに、『海のかなたのローマ帝国　―古代ローマとブリテン島―』2003 年、岩波書店、増補新版、2105 年）。その際、「ローマ化」を帝国主義的な言説として批判しこれを使用すべきでないと主張した考古学者たちの一部が、「ローマ化」に代えて「クレオール化」を提唱したことも紹介したが、その後も議論は進んで、次には「グローバル化」を用いるべきとする学者も現れた。とくに、「ローマ化」概念とその事実上の創始者といってよいフランシス・ハヴァフィールド（1860 ～ 1919 年）の研究姿勢を厳しく批判した考古学者リチャード・ヒングリ（ダラム大学考古学教授）は、2005 年に単著 *Globalizing Roman Culture : Unity, Diversity, and Empire*,（Routledge, 2005）を発表したのである。この書でヒングリは、近年のローマ史研究がグローバルな見方と地域ごとの文化的な多様性という相互に関係する 2 つの側面を重視していることを踏まえつつ、世界の大部分が文化的にローマ帝国に統合されたその程度を精査しようとしている。

「グローバル化」理論をローマ世界のより良い説明のために適用できるかどうかの検討はさらに研究集会等で継続され、ヒングリの著書刊行のちょうど 10 年後に、2 人の考古学者（Martin Pitts、Miguel John Versluys）が編者となって論文集が刊行された。その名も *Globalisation and the Roman World: World History, Connectivity and Material Culture*（Cambridge University Press, 2015）である。ヒングリ自身も執筆者の一人として参加しているこの書物については、すでにわが国でも長谷川岳男氏による簡にして要を得た書評が公にされており（『西洋古典学研究』66、2018 年所収）、紹介や評価はそちらに譲りたい。この本には、「グローバル化」のローマ帝国ないしローマ世界への適用に必ずしも賛成しない論者やローマ史の専門家ではない学者も加わっているところが興味深いものの、全体としてはローマ史の理解に「グローバル化」は有用との考えが多くを占めている。

「ローマ化」概念を批判したり「グローバル化」概念利用を有効と主張したりしている学者たちは、理論ローマ考古学会議（Theoretical Roman Archaeology Conference 略称 TRAC）という学会に結集した考古学者たちといってよい。ヒン

グリはこの研究者集団のリーダー的存在である。2002年にカンタベリ市のケント大学で開催されたこのTRACの大会に参加した私は、ヒングリ博士と朝食のテーブルで話をする機会があり、学会後も編著 *Images of Rome : Perceptions of Ancient Rome in Europe and the United States in Modern Age*（Journal of Roman Archaeology Supplementary Series No.44, 2001）を贈られる光栄に浴した。同博士は非常に多作だが、その研究は、出世作といってよい *Roman Officers and English Gentlemen,*（Routledge, 2000）以来、常にローマ世界と近現代世界とを繋ぐ考察をおこなっていることが一番の特徴である。もっとも、これはTRACメンバーに共通するものともいえよう。そのヒングリは、上記の論集において、かつて「ローマ化」概念が帝国主義の時代と深く結びついていたように、「グローバル化」概念も20世紀末から21世紀初頭の現代世界に強く影響されている点を研究者は認識しなければならないと説いている。ヒングリは同じく、TRACが主管するローマ考古学論集シリーズの第1作目 S.G.Sanchez & A. Guglielmi（eds.）, *Romans and Barbarians beyond the Frontiers: Archaeology, Ideology and Identities in the North*, Oxbow Books, 2017の「序論」においても、考古学者たちによって構築されたローマの歴史像に関する考え方とそうした解釈が生まれた現代の事情との間にある複雑な関係を読み解くことの重要さを強調している。従って、彼が「グローバル化」を使おうとする場合、その利用に関わる問題点は認識しているわけである。

「ローマは最初のグローバル化した帝国である」と言われると一般には納得されるかもしれないが、「グローバル化」概念を適用してローマ世界を論じようとすることについては、本誌読者のローマ史研究者には賛否両論あるだろう。そもそも「グローバル化」をどう定義するかが問題となる。また、現代世界における「グローバル化」を好意的に受けとめている学者と難点ばかりを見出して批判的になっている学者とでは、ローマ世界にこの概念を適用するかどうかについて最初から見方が異なることになるであろう。

ところで、これは以前にも指摘したところであるが、こうしたローマ帝国に関する議論（ないしローマ世界の解釈）は、考古学者によって主導されている。歴史研究者はあまり熱心ではないのである。上記の論集 *Globalisation and the Roman World* はアムステルダムやオックスフォードでなされたTRACの研究集会に基づくから、執筆者の多数が考古学者であるのは当然であるが、「ローマ化」批判以来の学界の動きを見ても、こうした議論に熱心なのは考古学者である。この点は、一見似たような論争に見えるかつての古代資本主義論争とは大きく異なるように思われる。

もちろん、TRACが考古学界を代表しているわけではないし、またローマ帝国、ローマ世界の大きな把握に歴史研究者が無関心で個別実証研究ばかりやっているということでもない。考古学者たちの「グローバル化」適用に関する議論が進展し

ていた時期に、歴史学の側でも例えばClifford Ando, *Imperial Ideology and Provincial Loyalty in the Roman Empire*, Univ. California Press, 2000 のように、ローマ帝国についてのスケールの大きな研究も発表されていたのである。しかし、研究法と認識目標、そして研究成果発表のスタイルの違いははっきりしている。

それにしても、ローマは現代になぞらえられたり現代と類似の方途で論じられたりすることが実に多い。現代世界でもとくにヨーロッパ連合やアメリカ合衆国になぞらえられたりすることが多いのは、ローマが帝国であったことによるだろう。政界や言論界での比喩だけでなく、専門家の間でもなされている。わが国学界でもすぐ想起されるのは、ローマ史研究の泰斗、吉村忠典教授がかつて consul と praetor にそれぞれ「大統領」と「国務長官」という訳語を当てたことである（J.B.V.P. ボールスドン、吉村忠典訳『ローマ帝国　―ある帝国主義の歴史―』平凡社、1972 年）。当然アメリカ合衆国に擬したわけである。確かに、強国が先住民を支配下に入れて建国し、多様な民族が 1 つの理念の下に集って国家が出来上がっていると解釈すれば、そして対外的に「帝国」とみなせる強大な軍事力を持っているところに注目すれば、ローマ帝国とアメリカ合衆国は似ているといえよう。

吉村教授は 2003 刊行の主著『古代ローマ帝国の研究』（岩波書店）では、consul と praetor をそのまま「コンスル」「プラエトル」と表記し、この書に収められた「付説　公職と『反』公職―古代ローマ共和政期の公職をめぐって―」においては、consul は「統領」とまず訳し、次いで前 366 年以後については「大統領」、praetor を「小統領」としている。そして、「『執政官』『法務官』など日本で用いられている訳語はまったく便宜的なもので誤解を招きやすく、むしろ『按察官』のような曖昧模糊とした訳語の方が『使える』といえるかもしれない」（292 ページ）と書いている。吉村教授に限らず、日本のローマ共和政研究者の方々は公職の訳語にずいぶん神経を使い、ローマという歴史的構築物をいかに正確に理解し日本語で表現するか真摯な努力をしてきたが、その吉村教授がアメリカ合衆国になぞらえる訳語を使われたことは、原著の都合もあるかもしれないが、気になるところである。

ローマとアメリカ合衆国の共通点に注目するあり方を悪しきアナロジーとして切って捨てることはたやすい。しかし、歴史学者が過去を考える作業は自身が生きている時代に拘束されるのであるから、時代を超えた類推が持つ問題発見の効果を考えれば、こうした試みもあながち退けることはできない。想えば、アメリカ合衆国国防総省（ペンタゴン）の戦略の専門家が今日の軍事に使用する用語で書いた E.N.Luttwark, *The Grand Strategy of the Roman Empire from the First Century A.D. to the Third Century*, Johns Hopkins University Press, 1976 は、学界で多くの議論を巻き起こし、今日ではローマ帝国の軍事史に関する基本文献になっている。

ローマ世界と現代世界との間に近似するところを見つけることは、少なくとも表

面上似ている現象についてその原因や社会構造の相違点を探索する作業へと研究者を導き、新しい研究の分野を開く手立てとなるかもしれない。しかし、浅はかなアナロジーの陥穽に陥る恐れもある。このことは、個別実証論文を書いているときにはあまり気にならなくとも、広い読者を想定した一般書を書くときには、ローマ史研究者を悩ませる重い問題となるだろう。何のために古代史を研究するのか改めて問われるからである。

（このエッセイの一部は、JSPS 科研費 18K01028 の助成を受けたものです。）